

1990 年度埋蔵文化財  
発掘調査報告書

1 9 9 2

新潟市教育委員会

# 例 言

1. 本書は1990年度に実施した周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の調査を中心とした概要報告書である。
2. 調査は新潟市教育委員会が主体となり文化行政課が所管した（1991年度より機構改革により生涯学習課が所管）。
3. 調査で得た資料は新潟市教育委員会が一括して保管している。
4. 本書には新潟市教育委員会が昭和47年度から平成2年度までに実施した発掘調査等の一覧と新潟市教育委員会が発行した埋蔵文化財調査報告書一覧を掲載している。
5. 現地調査から本書の作成に至るまで、多くの方々・機関から指導・協力を得た。

# 目 次

1. 1990年度調査概要	1
1. 新潟市の遺跡概要	1
2. 1990年度管内調査概要	2
2. 山木戸遺跡試掘調査報告	5
3. 的場遺跡発掘調査概要	8
1. 遺跡の環境と調査地	8
2. 地形と遺跡の概要	10
3. 遺 物	12
4. まとめ	13
付節. 的場遺跡史跡公園整備	15
付編. 遺跡調査の歩み	23
1. 平成2年度までの調査	23
2. 埋蔵文化財調査報告書一覧	24

# 1. 1990年度遺跡調査概要

## 1. 新潟市の遺跡概要

新潟市は信濃川・阿賀野川の河口部に位置している。市域の地形は、ある時期の海岸線を示す砂丘列と砂丘間低地からなる。砂丘間低地には砂丘列によって流路をさえぎられた河川が蛇行を繰り返した跡である自然堤防があるほかは潟湖などの低湿地が広がっている。また市域は地盤沈下が著しいため、標高の低い砂丘列や砂丘列の裾部は自然堤防をはじめとする河川堆積物に覆われている部分が多い。

市内の遺跡は現在120ヵ所ほど確認されており、そのすべてが砂丘列と自然堤防上に位置している。遺跡の年代的出現は砂丘の形成と関連している。内陸の大江山地区・亀田地区の砂丘列（新砂丘Ⅰ）では縄文時代中期以降の遺跡が、石山・濁川地区の砂丘（新砂丘Ⅱ）では縄文時代晩期以降の遺跡が、現海岸砂丘列（新砂丘Ⅲ）では奈良時代以降の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は10数ヵ所あるが、石鏃・磨製石斧等の石器が少量出土しているだけで、土器はほとんど見つかっておらずいずれも集落ではなく、狩猟の場であったと考えられる。この状態は弥生時代後期まで継続するようである。弥生時代・古墳時代の遺跡はそれぞれ数ヵ所ありいずれも集落跡と見られるが、弥生時代後期・古墳時代前期にややまとまった資料があるほかは断片的である。奈良時代の遺跡は10数ヵ所であり、大規模な遺跡が目立つようになる。平安時代に入ると60数遺跡と遺跡数は急増するが奈良時代の遺跡と比較して規模は小さくなる。中世の遺跡も50数遺跡と数は多いが資料は断片的で詳細は不明である。

これらの遺跡が立地する微高地は近世以来市街化・集落化している部分が多く、遺跡の発見が困難である。また、市街化・集落化していない部分の多くは開畑や砂丘間低地の乾田化のための砂取りによって削平が進んでおり遺跡の遺存状態は良くない。さらに、海岸部の標高の高い砂丘列（10数m～50数m）はその堆積砂の厚さから大規模な掘削時以外に遺跡の発見はできず、発見時には破壊が進んでいる場合が多い（注1）。さらに、前述の地理的要因から沖積面下に埋没した未知の遺跡もまだあるものと考えられる（注2）。

注1 市域北東端の港湾開削時に発見された出山遺跡（Na12）と東港太郎代遺跡（Na5）は砂丘を約10m掘り下げた段階で発見されている。

注2 耕作時に水田下より備蓄銭が出土する例（Na104～Na107）や遺跡の大部分が沖積面下に埋没していた的場遺跡の例（Na113、3章参照）などがある。

## 2. 1990年度管内調査

同年度の開発に伴う現地調査は、本格調査1件・試掘立会い調査5件である。また事前協議

による分布調査が2件ある。

本格調査1件は前年度から継続事業である小新的場遺跡の調査である。今年度では遺跡の西側部分を調査し、前年度同様の多量の漁具や祭祀具等のほか、木簡・和同開珎・銚帯金具・大刀金具などが出土した。2章にその概要を記す。

試掘調査は山木戸遺跡・大道外遺跡で実施した。山木戸遺跡では遺物包含層および遺構大道外遺跡は既に砂取りによって開発予定地は削平されており、遺物包含層および遺構が存在しないことが確認されたため工事着工となった。

立会い調査は前山遺跡・山木戸遺跡隣接地・緒立城館跡隣接地について実施したが、ともに遺物含層・遺構等は確認されず、工事は継続された。

分布調査は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外での大規模開発に伴い、坂田と鳥屋野瀉南部で実施した。赤塚地区では開発予定地の水田面で須恵器・珠洲焼きの散布が確認され、翌4月に試掘調査を実施した。その結果それらの遺物は客土とともに搬入されたもので、予定地が遺跡でないことを確認したため工事着工となった。鳥屋野瀉南部の分布調査では遺物の散布は全く確認されず工事着工となった。

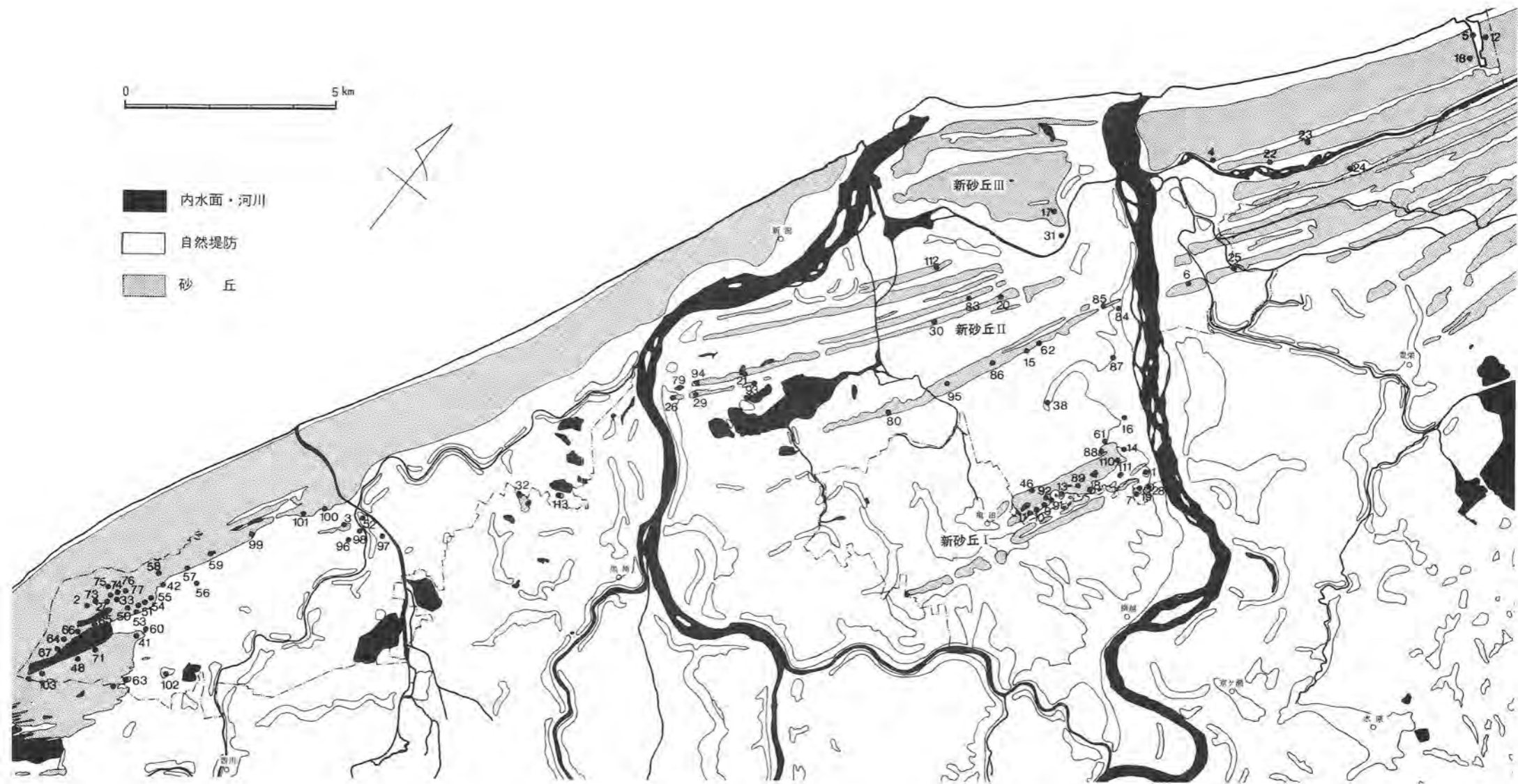
#### 本格調査

	(遺跡番号) 遺跡名	届出・通知月日等 調査原因	届出地番 面積	調査期間	調査結果
1	113 的場	1989.6.9 法第57条 の2 土地区画整理	小新字的場4045番は か 3,200㎡	4月16日～11月9日	3章参照

#### 確認調査・立会い調査・分布調査

	(遺跡番号) 遺跡名	届出通知月日等 調査原因	届出地番 面積	調査区分 調査期間	調査結果・取扱い
1	112 山木戸	(事前協議) マンション建設	山木戸4-826-203 800㎡	試掘調査 7月2日～7月5日	遺物包含層・遺構(井戸・ 柱穴等)を確認。1991年度 本格調査。
2	11 前山	1990.8.9 法57条の 2 個人宅造	北山字前山342 186㎡	立会い調査 9月21日	遺物・遺構とも確認されず 工事継続。
3	112 山木戸 (隣接地)	1990.10.9 法57条の 2 個人宅造(車庫)	山木戸4-16-5 127.5㎡	立会い調査 10月21日	遺物・遺構とも確認されず 工事継続。
4	32 緒立城館跡 (隣接地)	(事前協議) 警察署移転新築	小新字尾立4062-1 ほか	立会い調査 2月20日・21日	遺物・遺構とも確認されず 工事継続。
5	92 大道外	1991.2.14 法第57 条の2 個人宅造	丸山金山字金塚660 459㎡	試掘調査 3月19日	開発範囲内は既に削平。工 事着工。
6		(事前協議) 大学建設	坂田字カタハタ	分布調査 1991年3月21日	須恵器・珠洲焼片の散布を 確認。翌年度4月試掘調査。
7		(事前協議) スポーツゾーン開発	鳥屋野瀉南部地域	分布調査 1991年3月22日	遺物採集できず。

#### 1990年度管内調査



遺跡No.	名称	時代	遺跡No.	名称	時代	遺跡No.	名称	時代	遺跡No.	名称	時代	遺跡No.	名称	時代	遺跡No.	名称	時代
1	中山	縄文・古墳～平安	21	親仁山	平安・中世	41	大藪	奈良～室町	61	直り山B	平安	81	法華塚	江戸?	101	内野潟端B	中世
2	荒所A	縄文	22	向山	古墳?・平安	42	木山	平安・鎌倉	62	猿ヶ馬場B	鎌倉・室町・江戸	82	津島屋の石仏	南北朝	102	藤藏新田	中世
3	六地山	弥生・奈良・平安・鎌倉	23	横山	平安	43	赤塚	古墳?	63	坂田	平安・中世	83	竹尾西	平安	103	原付	平安
4	神谷内	奈良・平安	24	上船橋	平安	44	土塚	中世?	64	上谷地A	平安	84	本所居館跡	室町	104		中世(古銭出土地)
5	東港太郎代	奈良・平安	25	築上山	平安	45	大藪塚	鎌倉・室町	65	病院脇	平安	85	石動	古墳・平安・中世	105		中世(古銭出土地)
6	新崎	奈良平安	26	上中沢	中世	46	北山	平安	66	上谷地B	平安	86	下場	平安・中世	106		中世(古銭出土地)
7	笹山前	縄文・弥生・奈良・平安	27	赤塚神明社	平安	47	細山石仏	室町	67	沼	平安	87	江口館跡	不明	107		中世(古銭出土地)
8	茗荷谷	奈良・平安	28	城山	古墳・平安・鎌倉	48	北蒲原A	縄文・平安	68	欠番。No48内		88	小丸山	縄文・平安・中世・近世	108	南蒲原	縄文～近世
9	彦七山	奈良・平安	29	地蔵山	鎌倉・室町	49	石ナゲ山		69	欠番。No48内		89	茗荷谷基地	平安	109	岡山の石仏	中世
10	金塚山	奈良・平安	30	竹尾	中世	50	屋敷浦	弥生・奈良・平安	70	欠番。No71内		90	欠番。No13内		110	松山	中世
11	前山	奈良・平安	31	古屋敷	室町・江戸	51	屋敷浜	平安	71	北蒲原B	平安	91	清水が丘	平安	111	松山向山	平安
12	出山	奈良・平安・鎌倉・江戸	32	緒立城館跡	室町・安土桃山	52	高山		72	欠番。No71内		92	大道外	平安・中世	112	山木戸	古墳・平安・中世
13	丸山	平安	33	神山	縄文	53	前田	平安～室町	73	荒所B	平安	93	女池稲荷	平安	113	的場	縄文晩期～中世
14	直り山A	平安	34	欠番。No31内		54	茶畑	縄文・平安	74	ツル子A	平安	94	愛宕の塚	中・近世?			
15	猿ヶ馬場A	平安・室町	35	宮浦	平安	55	ヤマサキ	縄文・弥生・中世	75	吹荒地	平安	95	石山の石仏	中世			
16	大淵	平安	36	溜池	平安	56	伝念野毛	鎌倉・室町	76	ツル子B	平安	96	沢田	中世			
17	居浦郷	平安	37	青山	平安	57	淡曾根	奈良～室町	77	ツル子4	縄文・平安	97	前田	中世			
18	サン化学前	平安	38	西山	平安	58	木山墓所	縄文	78	欠番。No41内	中世(古銭出土地)	98	高山西	中世			
19	神明社裏	平安	39	庚塚	平安	59	尼池	鎌倉・室町	79	鳥屋野	中世	99	道下	中世・近世			
20	寺山	平安	40	親爺屋敷	平安	60	観音原	縄文	80	石仏山	中世	100	内野潟端A	中世			

第1図 遺跡の分布と地形概念 (1:125,000)

## 2. 山木戸遺跡確認調査結果報告

新潟市教育委員会がマンション建設予定地にかかる遺跡の範囲等を確認するために実施した標記調査の結果を以下に記す。

### 1. 調査体制

- 1) 調査主体 新潟市教育委員会
- 2) 調査担当 小池邦明（新潟市教育委員会文化行政課課員）
- 3) 調査員 本間桂吉（同上）

### 2. 調査期間

平成2年7月2日～5日

### 3. 調査対象地

開発予定地のうち、建物（教会）部分を除く調査可能な畑地約800㎡。

### 4. 調査区

試掘坑は当初計画では畑の地割り線を基軸に約20m間隔で設定していたが、現地では隣接する保育園が甘藷の作付けを行っていたため、作物への試掘調査の影響が最小となるよう配慮し、若干不規則な配置となった。試掘坑の深さは70cm～2mである。



第2図 試掘坑配置図 (S=1:2,500)

## 5. 調査面積

1・2・5トレンチが6㎡（2m×3㎡）、3・4・6・7・8トレンチが4㎡（2m×2m）、9トレンチが1㎡（1m×m）の合計39㎡である。

## 6. 調査方法

人力による掘り下げ及び精査。

## 7. 調査結果

(1)層序 調査地は畑として利用されており、全般に深くかく乱されていた。特に南側（砂丘頂部側）は基盤砂層が浅いためかく乱を強く受けており、遺物包含層は存在せず耕作土層・客土直下は地山（黄灰褐色砂層）となっていた。北側の6・9トレンチには遺物包含層（暗褐色土）が明瞭に認められるが、漸移層（暗褐色砂層）が存在せず地山（黄灰褐色砂層）となる。各トレンチの深度から、南北方向に地盤が傾斜しており、北側ほど耕作土・客土が厚く堆積していることが確認された。

(2)遺構 南側（砂丘頂部側、1～4トレンチ）は、深耕及び客土による攪乱が地山の黄灰褐色砂にまで達しており、遺構・遺物包含層の遺存状態はよくない。北側（砂丘裾部側、5～9トレンチ）には遺物包含層とともに遺構が存在していた。6トレンチでは小ピットが、7トレンチでは土坑が検出された（写真3）。これらの遺構は翌年の本格調査により掘立柱建物の柱穴および井戸であることが判明した。

(3)遺物 遺物量はコンテナ約1箱である。大部分は耕作土層・客土層から出土したものである。また、7トレンチの土坑井戸覆土からも出土している。

出土遺物は土器類では中世陶磁器類（珠洲焼・青磁）が少量あるほかは平安時代（9世紀後半～10世紀）のものが大半で、中でも佐渡小泊窯産の須恵器の杯・杯蓋・甕・壺、土師器の甕・鍋がその大部分を占め、灰釉陶器の瓶破片も少量ある。また、その他の遺物にはフイゴ羽口・鉄滓・砥石・墨書土器等があり、平安時代から中世におよぶ集落跡と考えられる。

## 8. 調査後の対応

本遺跡は南側（砂丘頂部側）は耕作等によるかく乱を受け、遺存状態はあまり良好ではないものの、北側（砂丘裾部側）では遺物包含層・遺構が確認され、建物（教会）敷地下にも遺跡が広がっていることが想定された。そこで、この結果をもとに、県教育庁文化行政課・有限会社ヨシゼン（開発事業者）と協議を行い、建物（協会）移転後の1991年春から開発予定地のうち、マンション建設部分について本格調査を実施することで合意を得た。



1 調査区全景



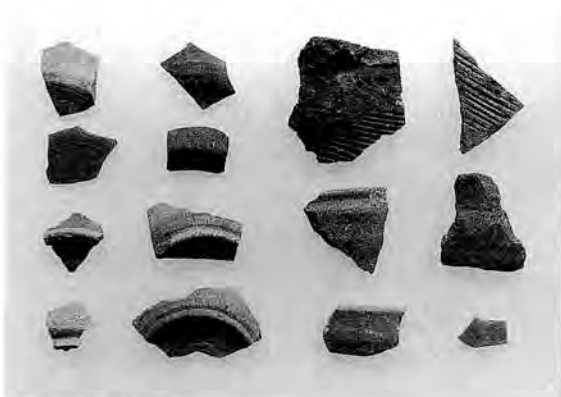
2 調査風景



3 7トレンチ遺構検出状況(井戸)



4 須恵器壺破片



5 須恵器杯・珠洲焼壺破片



6 土師器杯破片



### 3. 的場遺跡発掘調査概要

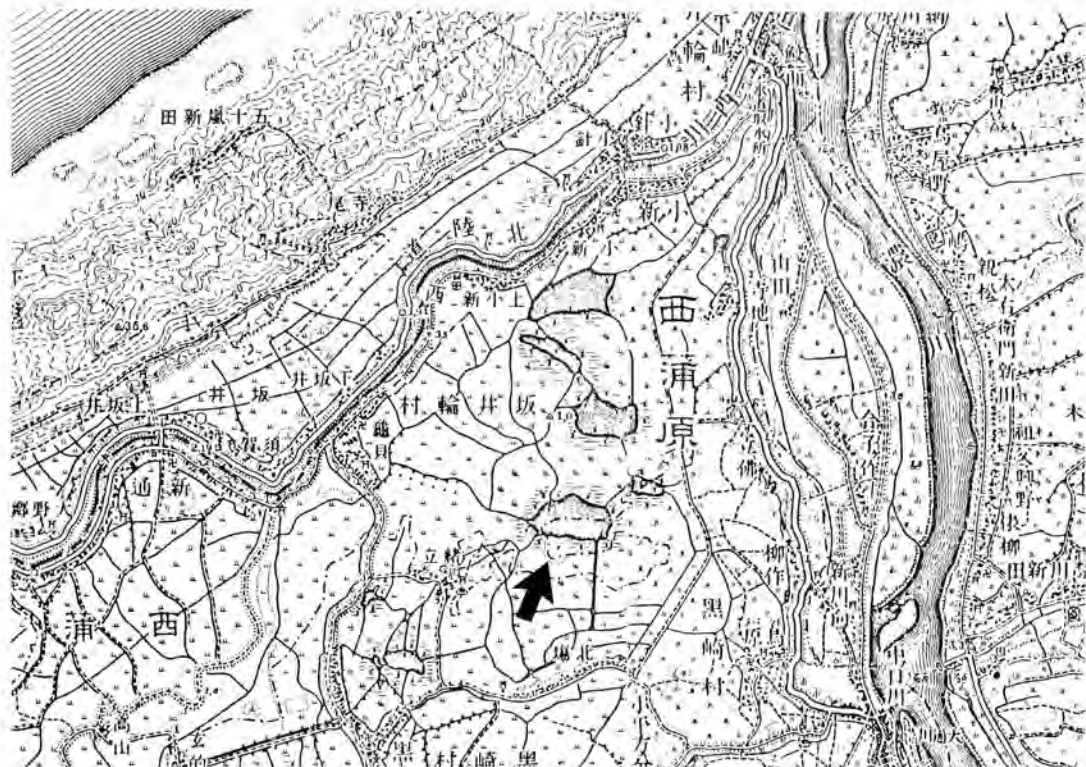
#### はじめに

新潟市教育委員会は的場土地区画整理組合から委託を受け、1989年・1990年の2ヵ年にわたり、小新字的場の的場遺跡の発掘調査を実施した。整理作業は現地調査に引き続いて実施しており、現在は接合が終了している。現段階での調査概要を以下に記す。なお、現地調査には文化行政課課員小池邦明・藤塚明・本間桂吉・石田栄一・山本浩一郎があたった。

#### 1. 遺跡の環境と調査地

**位置** 新潟市小新的場4045番地ほかに所在する。遺跡は現在の海岸線から南へ約4km、信濃川の現流路から西へ約1.5km、信濃川の分流である西川から南東へ約1.5kmの地点にある。

**環境** 遺跡付近は信濃川とその分流である西川の自然堤防に包まれた標高マイナス1m以下の低湿地で、近年までの場潟をはじめとする潟湖が散在し、舟運が主要な交通手段であった。遺跡は低湿地の中に島状に浮かぶ砂丘上に営まれており、西側約800mに位置する縄文時代晩期から中世にいたる緒立遺跡と同様の立地にある。また、調査により奈良時代にはすでに遺跡の立地する砂丘の周辺はマコモ・アシ等が繁茂する低湿な環境であったことが確認されている。

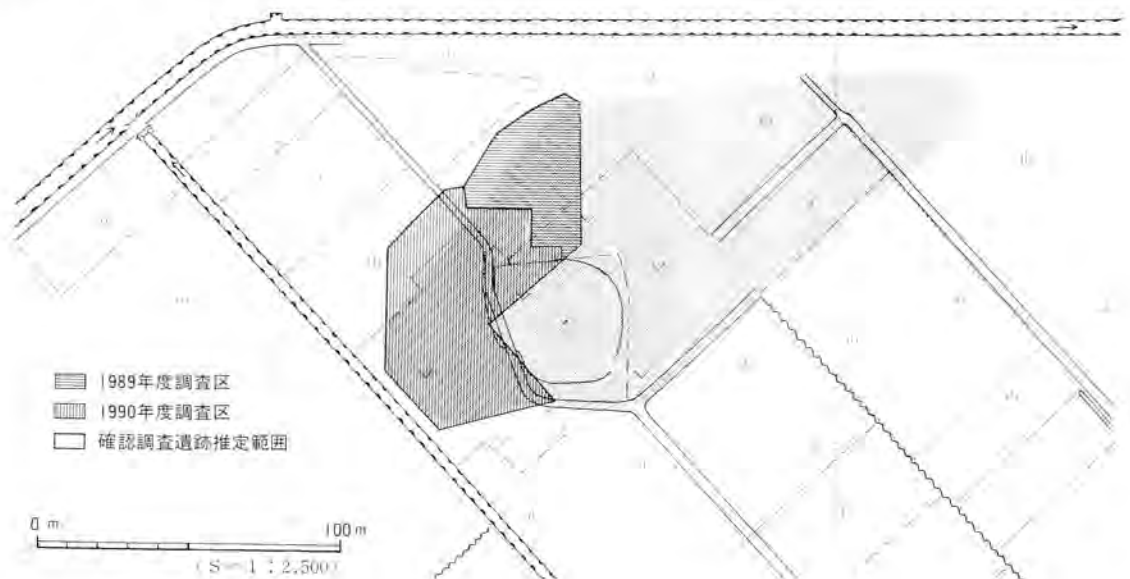


第3図 遺跡周辺地形図 (1:50,000 大正3年版)

調査時までの遺跡の状況 遺跡の立地する砂丘の最頂部（第4図の標高0 mライン周辺）のみが沖積面上に島状に露出して畑地となっており、周辺は湿田および谷地となっていた。砂丘頂部の標高は0 mから1.3mで、周辺は標高マイナス1 mからマイナス1.5mであった。

調査地 1986年に実施した範囲等確認調査による推定範囲13,100㎡のうち、1989年度が中央北側部分の1,330㎡、1990年度が西端部分3,200㎡の合計4,530㎡である。これは、遺跡の立地する砂丘の西斜面及び北西斜面・南西斜面の一部に相当する。調査地の最深部の標高はマイナス4.6mを測るが、同地点で杭列が確認されていることから、同地点より標高の高い部分は遺跡が営まれていた当時は地上部であったと認められる。当時の水面のレベルが現在と同じであるならば、遺跡の立地する砂丘は4 m以上沈下したこととなる。また砂丘頂部は一部削平を受けていることから、砂丘頂部と調査地最深部との比高差は6 m以上となり、当時は湿地帯の中に島状に浮かぶ小高い砂丘であったと推定される。遺跡廃絶後の堆積物は粘土・シルト・洪水堆積砂（粒子が粗く、砂丘形成砂とは明確に区別される）・ガツボ（マコモ・アシなどの腐植）で、幾層にもわかれて堆積している。

発掘状態 調査区の周囲を1/2勾配（斜度26度）の法面とし、開渠（排水溝）を設置して24時間排水を行いつつ調査を実施した。開渠を砂層の地山に設置できた部分では標高マイナス3.6m付近でも乾燥した状態で調査をすることができたが、地山がガツボを多量に含む砂層である部分や、砂層上にガツボが厚く堆積している湿地部分では排水不良の状態となり、調査は困難であった。湧水は塩分を多量に含み乾燥すると白く結晶を生じる。また、付近は天然ガスを日常生活に利用しているほど天然ガスの噴出量が多い地域であり、最深部では湧水とともに天然ガスが噴出し、点火すると炎上する。



遺物包含層 大半は腐植を多量に含む黒褐色砂層で粘性が強く乾燥すると非常に硬化しクラックを生じる。遺物包含層の厚さは30cmから80cmと厚いが、色調等で分層が可能なところはごく一部であった。また、最深部では遺物包含層が砂層から砂層の上に堆積したガツボ（マコモ・アツ等の腐植）層に変わることから、この部分は当時から既に水際の湿地となっていたことが



第5図 地形と遺構配置 (S=1:800)

確認できる。遺構は漸移砂層（褐色砂層）で確認できるものもあるが、大部分は基盤砂層（明褐色砂層・青灰色砂層）で確認された。しかし、地山が腐植を多量に含み黒褐色を呈する部分では遺構の識別が困難で、確認できなかった遺構も多いものと思われる。

## 2. 地形と遺跡の概要

調査区は遺跡の立地する砂丘の西斜面及び北斜面・南斜面の西よりの部分ではほぼ南北方向に起伏がある。全体的にみて地形は4 C・4 Dグリッドにある砂丘ピーク列で南北斜面に分けられる。このピーク列は沖積面上に露出していたため調査時にはすでに基盤砂層まで削平されており、遺物包含層・遺構はともに確認されなかった。また、調査区西端には東にのびる谷があり、これも遺跡における北斜面域を明確にしている。

遺構の分布は地形によく合致する。北斜面域は起伏をもちながらしだいに低くなる。4 C・4 Dグリッドの急斜面には土坑が集中して分布し、3 C・3 D・3 Eグリッドのマイナス3 m前後の平坦地には、掘立柱建物が多数分布している。2D・2Eグリッドにはマイナス3 m～マイナス4 mの窪地状を呈する部分があり、土器細片が多量に出土するほか櫛や縄などが出土している。ここでは径5 cm程度の杭列のみが分布しており、空閑地と考えられる。1 D・1 Eグリッドも2 D・2 Eグリッドと同様に遺構は径5 cm程度の杭列のみであるが、遺物包含層が砂層から砂層上に堆積したガツボ（マコモ・アシ等の腐植）層と変わるためこの付近は当時の水際と想定される。ここでは土器類の出土も多いが、浮子や櫛などの漁業関連遺物や人形や舟形・斎串などの祭祀関連遺物が多く出土している。西斜面には4 Bグリッドを中心とした谷地形の湿地部分があり、多量の人形・刀形・斎串等の祭祀関連遺物、木簡・木沓・浮子・独案等の多量の木製品、クルミ・モモ等の種子や土器類が多く出土する。南斜面では5 Cグリッドを中心としたマイナス2.2m前後の平坦面に土坑・集石・ピットが散在し、掘立柱建物が1棟存在する。ここでは、特に細い管状土錘が集中して出土する傾向がある。6 Bグリッドには遺構集中地区があり、掘立柱建物や大形の柱穴・土坑が分布するが、地形からみて西へはあまり広がらないものと考えられる。6 C・6 Dグリッドには掘立柱建物が1棟とこれに関連すると思われる径数cmの杭列がその南側に1列あるほかは遺構は明確ではない。ここにも湿地があるが、北端および西端の湿地とは違って木製品は少なく、木製品の素材と見られる木片や切株、刀子による削りカスや焦げた木片等が多い。製品には下駄・槽（船）がある。

## 3. 遺物

遺物については概要を『1989年度埋蔵文化財発掘調査報告書』で述べてあるので、ここでは祭祀関連遺物・銭貨・銚帯金具・大刀足金物・浮子について記す。

祭祀関連遺物 今年度の調査区には遺跡西端と南端に湿地部分があり、そのうちの西端の湿地部分から祭祀関連遺物が集中して出土しており水辺での祭祀を示すものとみられる。いずれもマコモ・アシ等の腐植層中から墨書土器や木簡などとともに出土している。時期は伴出した土器から8世紀前半から9世紀中葉とみられる。

a)人形(1~11) 板の側面からV字形の切り込みをいれて頭部と胴部を区別し、側面と下端からの切り込みにより両腕と脚を表現したもの。目・鼻・口を確認できるものはすべて刻線・刺突で表現する。1は頭頂を平らにつくり頭部を方形に表現する点が他の人形とは異なり、目・鼻・口は確認できない。2は怒り肩である点と足の表現がほかとは異なる。3~9はいずれも頭頂を山形につくり撫で肩であるが、やや細身で脚の切り込みが鋭くやや厚手である7や、全面にはほぼ平行な刻線が施されていることから曲物の側板を転用したものと考えられる9などがある。10・11は頭頂を台形につくりやや怒り肩である。腐食が進んでおり目・鼻・口は確認できない。2~11はほぼ同一地点から出土している。

b)馬形(12・13) 板の側面を切り込んで馬を形作ったもの。いずれも抽象化されており、脚をはじめ目・鼻・口・耳は表現されていない。12は鞍の前後輪を突出させることで鞍を表現したやや写実的な馬形。13は鞍の表現を欠く抽象化が著しく天地逆であるかもしれない。

c)刀形(14・15) 細板を粗く削って刀を形作ったもの。いずれも抜身の状態で鏝は表現されていない。14は頭椎の大刀状の刀形である。刀身と柄を表現しているが刃はつけていない。15は刀身と茎を表現したもので片刃である。刀子形とすべきかもしれない。

d)手づくね土器(16~19) 土器内面に指が1本入る程度の小形の土器。内外面に指頭圧痕が残り、土師質に焼成されている。

e)斎串(28) 細板の両端を尖らせ、側面に切り込みを入れたもの。西端の湿地の腐植層を中心に100本程度出土している。28はそのうち最大のもので全長65.1cmを測る。

銭貨(写真21~43) 銭貨には和同開珎22枚と神功開寶1点がある。和同開珎はいずれも開の字を隷書体につくるもので新和同銭と呼ばれるものである。21~40は3D18グリッドの大形掘立柱建物の南西隅から一括出土したもので柱穴掘形内に埋納されたものと考えられる(写真16)。いずれも磨耗はほとんど認められず、うち1枚には布片が付着していたため、紐に通したうえで袋に入れられたか布にくるまれて埋納されたものと考えられる。41・42・43は遺跡西端の谷から人形・馬形・斎串等とともに出土したものである。以上の出土状況から銭貨はいずれも祭祀関連遺物と考えられる。

大刀足金物(20) 鋳銅製の足金物で前後から鋳型を合せて作られており、上部に花卉状の装飾を施し断面三角形の脚をつけたもの。内径は縦39mm、横12mmと細身であり、刃部長2尺以下の横刀の足金物と考えられる。

銚帯金具(21~27) 銚帯金具は7点出土している。刺金が2点あるほか、丸軛にも大小が

あるなど複数の銚帯が存在していたことがわかる。全て包含層から出土しており特定の出土傾向は認められない。21は鉸具の外粹片で全面に鑢目が残る。軸棒は遺存していない。帯幅40mm程度の銚帯金具に復原することができる。22・23は鉸具の刺金で軸棒は遺存していない。断面形は三角形と五角形を呈する。24は横幅40mmを測る丸柄の表金具で細目の透し孔をもつ。外面は平滑に研磨され黒色漆の塗膜が遺存している。内面は鑄放したままで4本の鉸足を鑄出している。25は横幅39mmを測る巡方の表金具で破損・変形が著しいが部分的に黒色漆の塗膜が遺存している。鉸足は4本鑄出しているが、1度脱落した金具を再び装着するためか、鉸足のすぐ脇に貫通していない鉸受けの孔を穿っており鉸足の一部が削りとられている。また、透し孔と上端のほぼ中間部分の両側端に鉸受けの孔が2カ所ある。26は横幅27mmを測る丸柄の表金具で鉸足を3本鑄出している。部分的に黒色漆の塗膜が遺存している。27は鉸尾の裏金具で縦幅mmを測る。4カ所ある鉸受けの孔のうち先端のものには鉸足の一部が遺存している。

浮子(29～31) 小形のもの全長10～15cmの断面方形の棒材の両端側面に網に結縛するための切れ込みを入れている。大形のもの全長25～28cmで上辺がややふくらみ断面形が角をとった方形の棒材を素材としている。網に結縛するため両端の上面と側面には横方向の切れ込みを、底面には縦溝をいれたもの。遺跡の立地からこれが内水面漁業に用いられていたものとする。と鮭網の浮子である可能性が高い。なお、網への装着方法の参考として当遺跡の東約10kmにある阿賀野川の河口部で昭和30年代後半に撮影された鮭網の写真を示しておく(写真7)。

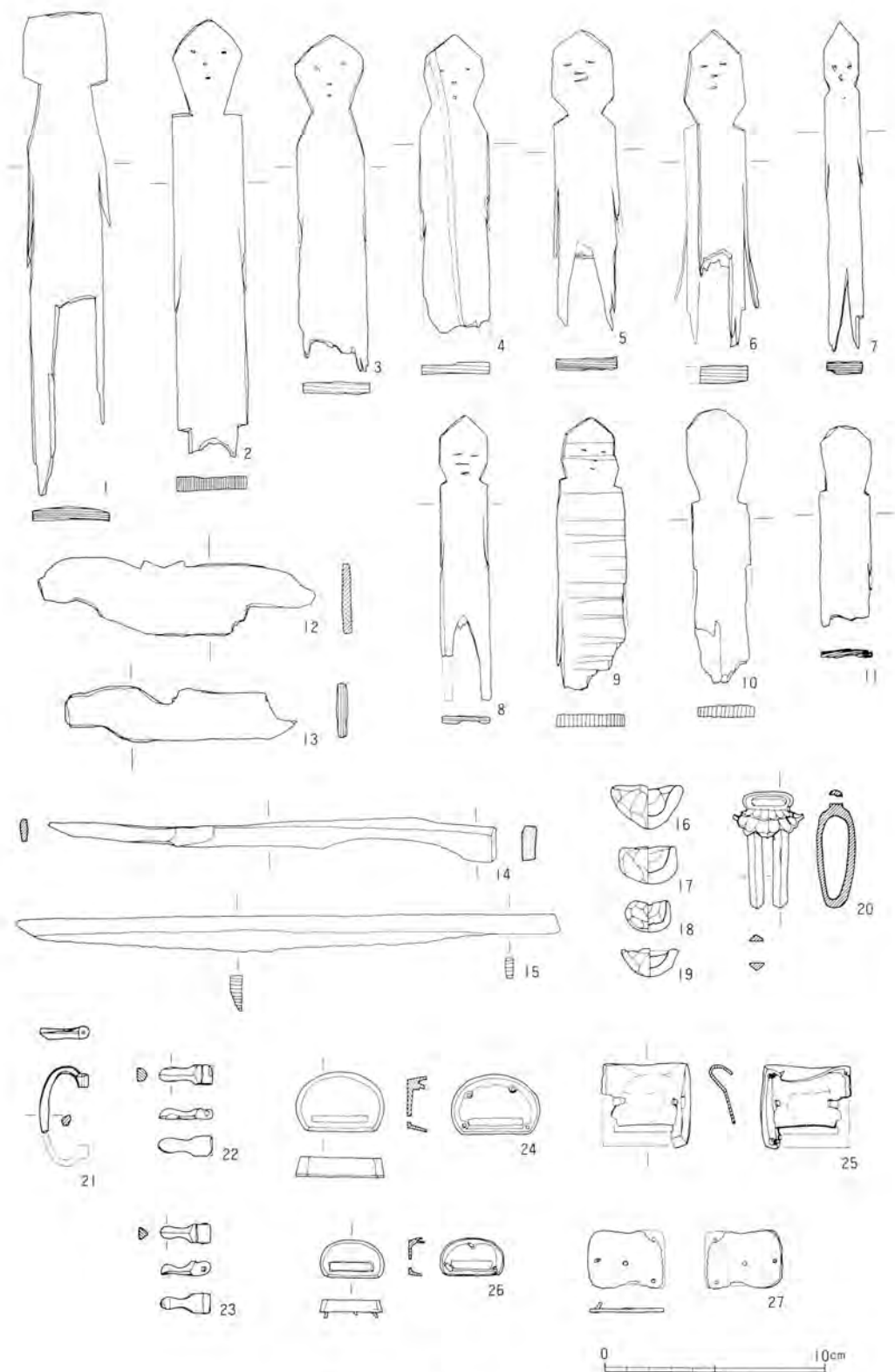
土器(写真46～53) 46は古式土師器の壺形土器である。海綿骨片を胎土に多量に含む。口径13.6cm、器高25.2cm、胴部最大径20.5cmを測る。47は双耳把手をもつ土師器甕である。ロクロ成形されているが平面形は把手方向にやや細長い楕円形である。口径17.7cm、胴部最大径23.2cmを測る。48は須恵器の高杯で、杯部径16.5cm、器高10.5cmを測る。49は京都の篠窯産の須恵器鉢で、県内では初の検出例である。口径20.4cm、胴部最大径20.8cmを測る。50は須恵器鉢である。胎土から佐渡小泊窯のものとみられ、口径29.0cm、器高8.7cmを測る。51・52は佐渡小泊窯産の須恵器碗である。51は口径16.6cm、器高7.0cm、52は口径15.2cm、器高6.8cmを測る。53は須恵器碗で胎土・調整が粗く、焼成も不良である。口径13.8cm、器高5.8cmを測る。

## 4 ま と め

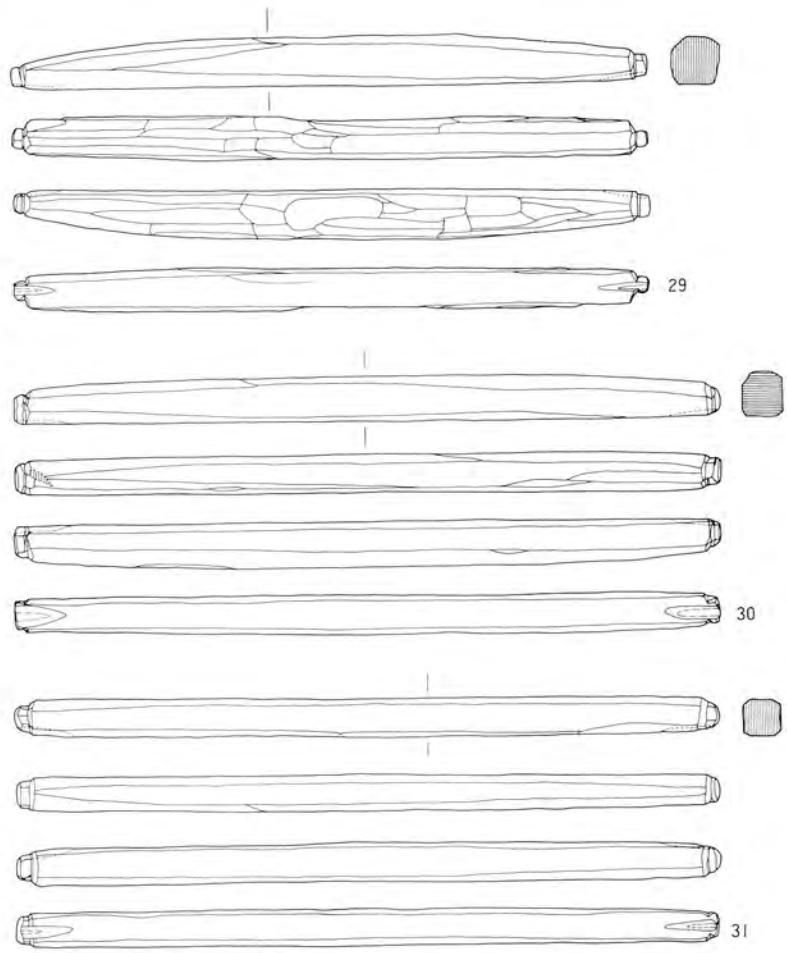
### 1) 各時代の概要

縄文時代～弥生時代 遺物には磨製石斧が1点と土器破片が10数点あるのみである。遺跡は集落ではなく狩猟の場であり、生活の場は他所にあったものと考えられる。

古墳時代 遺物内容から前期を主体とする集落と考えられるが明確な遺構は確認できていない。黒埼町緒立遺跡とほぼ同様に推移するため緒立八幡神社古墳と関係の深い遺跡と考えられる。集落の存立基盤は奈良・平安時代の様相もあり不明である。



第6図 出土遺物(1)



第7図 出土遺物(2)

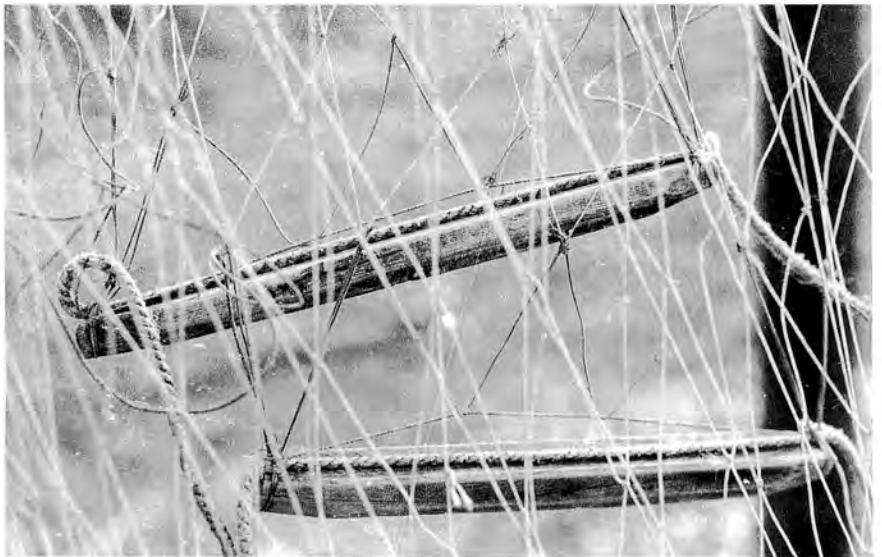


写真7 鮭網浮子結縛状況



奈良・平安時代（8～10世紀） 遺物の内容から一般の集落とは考えられず存立基盤を漁業においた遺跡と考えられる。本遺跡と同時期に成立する緒立C遺跡とは木簡や袴帯金具、律令祭祀関連遺物等の出土から見て何らかの関連をもっていたものと考えられるが、遺跡の存続期間や祭祀関連遺物の構成の違いから本遺跡と緒立C遺跡とは性格が異なる可能性がある。

遺跡の廃絶理由は明確ではないが地盤沈下等の自然要因も考えることができる。

## 2) 奈良・平安時代の様相

遺跡の特徴をいくつかあげ、奈良・平安時代の遺跡の性格について予測を記す。

- ①沖積地の中にある島状の小砂丘上に8世紀前半に現れ、10世紀まで存続すること。
- ②漁業関連遺物が多量に出土するのに対し、農具と見られるものはないこと。8,000本を優に超える管状土錘・木製の浮子・網針などがあるほか、木簡に「杉人鮭」、「二千三百八十八隻」など魚に関するものがあること。
- ③官人が遺跡と深く関わっていたこと。本遺跡には袴帯金具や大刀足金物・檜扇・木沓等の官人の装身具や人形・馬形・舟形・刀形等の律令祭祀関連遺物などのほか、「狄食」習書木簡があり北方政策との関連が認められる。
- ④大形の掘立柱建物が存在すること。これはその規模のほか、南西隅の柱穴に和同開珎を埋納したと考えられるなど一般の建物とは考えられない。現在のところ倉庫であり、物資管理を行っていたと考えている。

本遺跡は、同時期に成立する黒埼町の緒立C遺跡や聖籠町の山三賀II遺跡等が9世紀に衰退するのに対し10世紀代まで存続することから、他の同時期に成立する遺跡とは存立基盤が異なるものと考えられる。遺跡の存立基盤は、多量の漁業関連遺物から漁業と考えることができよう。また、魚の数を記した木簡や大形の掘立柱建物から単なる漁労性集落ではなく官人が関与して物資の管理を行っていた遺跡と考えることができる。管理していた物資については多量の漁業関連遺物や木簡から鮭をはじめとする水産物が主体であると考えられる。

越後は、庸・調・中男作物・贄として鮭および加工品を貢進する国であり（『延喜式』）、このことは水産物の管理に官人が関与する大きな要素と考えられる。

また、越後国司は陸奥・出羽両国司とともに夷狄に対して「饗給」をおこなうこととされており（『養老職員令』大国条）、また陸奥では「俘饗」とするため「狩漁之類」が行われていたことから（『類聚三代格』貞観一八年六月一九日太政官符）、本遺跡は蝦狄に水産物を「狄食」として供給することによって北方政策を支える遺跡の一つでもあったと考えられる。

## 関係文献

青木 宏 『新潟県的場遺跡緊急調査報告書』黒埼村教育委員会 1971年3月

小池邦明・藤塚 明・渡邊朋和 『新潟市小丸山遺跡・的場遺跡範囲等確認調査報告書』

新潟市教育委員会 1987年3月

小池邦明・藤塚 明・本間桂吉「的場遺跡調査概要」『1989年度埋蔵文化財発掘調査報告書』

新潟市教育委員会 1991年3月

本間桂吉 「新潟・的場遺跡」『木簡研究』13 木簡学会 1991年11月

渡邊ますみ 「新潟・緒立C遺跡」『木簡研究』13 木簡学会 1991年11月

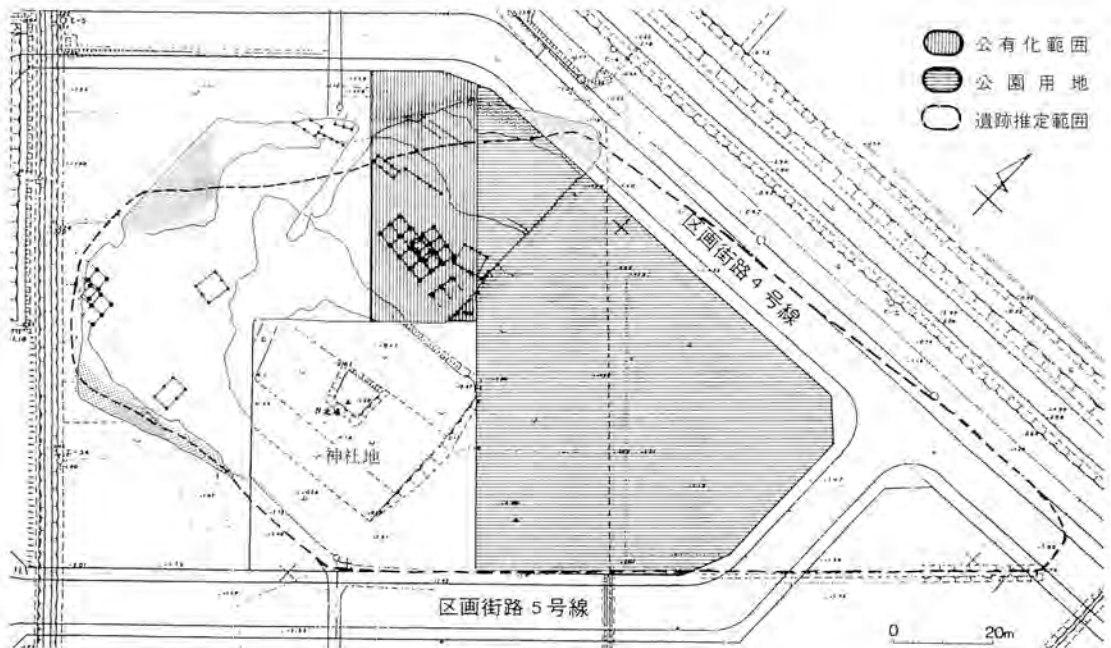
#### 付節. 的場遺跡の一部公有化と史跡公園整備について

土地区画整理事業にかかる的場遺跡の取り扱い、事前協議によって遺跡中心部と東側を公園・神社地として現状保存し、西側部分を発掘調査（記録保存）することが協定されていた。

しかしながら、平成元年・2年の調査によって全国的にも例がない漁撈性の遺跡であり、また佇足柵・沼垂城に代表される対エミシ政策とも関係が深い遺跡でもあるという当市の歴史を語る上でなくてはならない遺跡であることが判明し、当市文化財保護審議会においても遺跡の公有化についての提言がなされた。市としてもその重要性に鑑み、記録保存部分のうち大形掘立柱建物や和同開珎等が検出された遺構集中部分1,148㎡を買い上げ、当初の公園用地とあわせて5,960㎡（第8図）を史跡公園として整備することとなり現在整備計画を策定中である。

なお、遺跡の一部公有化にあたっては、土地所有者の方々ならびに的場土地区画整理組合よりご理解・ご協力をいただいた。記して感謝したい。

また、日本考古学協会および文化財保存全国協議会より遺跡の公有化と史跡整備・活用についての要望をいただき、上記保存・整備案を回答した。



第8図 史跡公園区域図



8 調査区遠景（1989年度調査区）



9 S B - 12



10 S K - 4 遺物出土状況



11 「狄食」習書木簡出土状況

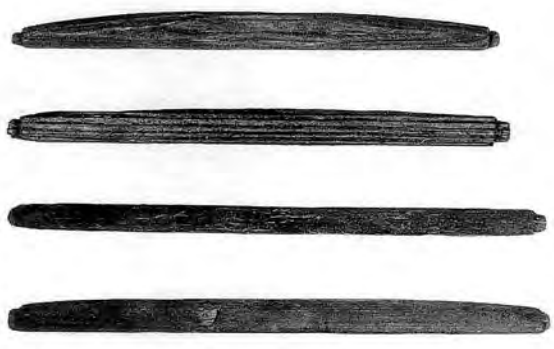


12 土錘出土状況

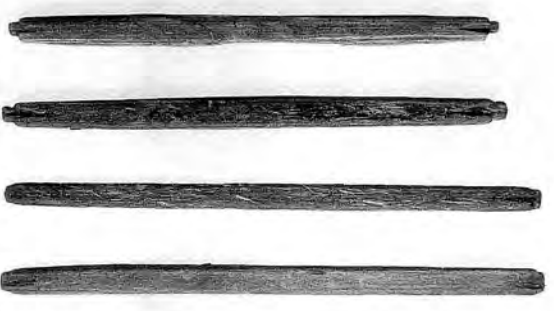
調査区と遺物出土状態



13 浮子(小)



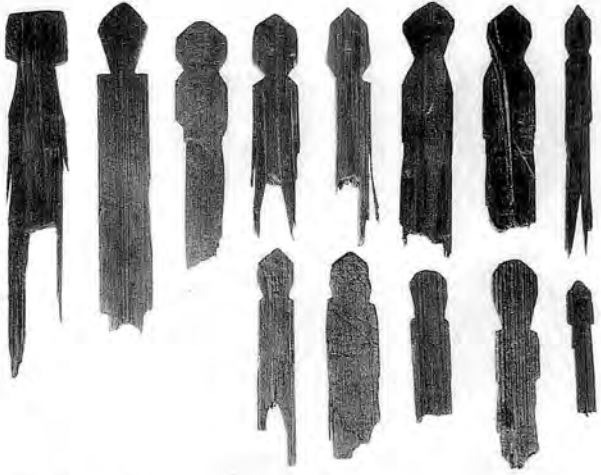
14 浮子(大)側面



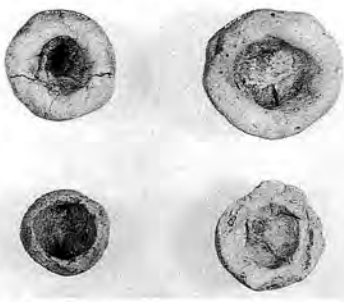
15 浮子(大)底面



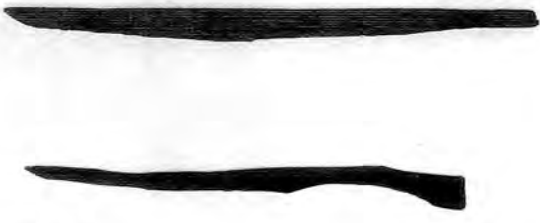
16 和同開珎出土状況



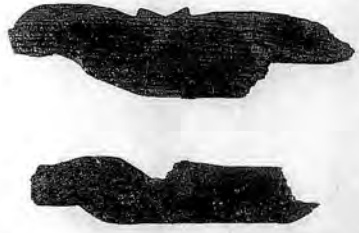
18 人形



17 手づくね土器



20 刀形



19 馬形

出土遺物(1)



21 22



23 24



25 26



27 28



29 30



31 32



33 34



35 36

錢 貨 (1)





37 38



39 40



41 42



43

No.23裏面付着布片

神功開寶出土状況

銭貨 (2)

番号	銭種	形式	縁外径G	縁内径N	郭外径G	穿径n	縁厚T	文字面厚t	重量W	出土地点
21	和同開珎銅銭	新和同	24.21	20.73	7.41	6.17	1.24	0.59	2.42	3 D18包
22	和同開珎銅銭	新和同	24.82	21.25	7.40	6.85	1.48	0.48	2.77	3 D18包
23	和同開珎銅銭	新和同	24.55	20.57	7.52	6.50	1.23	0.45	1.96	3 D18包
24	和同開珎銅銭	新和同	25.08	20.76	7.32	6.25	1.60	0.61	3.45	3 D18包
25	和同開珎銅銭	新和同	24.48	20.67	7.50	6.28	1.63	0.71	3.58	3 D18包
26	和同開珎銅銭	新和同	24.82	20.37	7.59	6.29	1.19	0.47	2.42	3 D18包
27	和同開珎銅銭	新和同	24.20	20.27	7.95	6.24	1.44	0.69	3.07	3 D18包
28	和同開珎銅銭	新和同	25.14	21.16	7.96	6.64	1.54	0.48	2.94	3 D18包
29	和同開珎銅銭	新和同	25.24	20.91	7.92	6.35	1.51	0.50	2.89	3 D18包
30	和同開珎銅銭	新和同	25.09	20.91	7.69	6.47	1.51	0.49	2.83	3 D18包
31	和同開珎銅銭	新和同	25.06	20.49	7.75	6.39	1.59	0.48	2.58	3 D18包
32	和同開珎銅銭	新和同	24.33	20.83	7.88	6.75	1.09	0.37	1.89	3 D18包
33	和同開珎銅銭	新和同	24.74	20.80	7.97	6.53	1.40	0.50	2.78	3 D18包
34	和同開珎銅銭	新和同	24.31	20.37	7.82	6.54	1.20	0.50	2.42	3 D18包
35	和同開珎銅銭	新和同	24.82	20.91	7.75	6.60	1.54	0.59	3.20	3 D18包
36	和同開珎銅銭	新和同	24.93	20.41	7.93	6.34	1.47	0.62	2.38	3 D18包
37	和同開珎銅銭	新和同	25.29	20.71	7.85	6.66	1.63	0.40	2.23	3 D18包
38	和同開珎銅銭	新和同	24.85	20.73	7.68	6.30	1.27	0.47	2.65	3 D18包
39	和同開珎銅銭	新和同	25.18	20.65	7.49	6.40	1.39	0.54	3.07	3 D18包
40	和同開珎銅銭	新和同	25.20	21.24	7.65	6.39	1.49	0.69	2.99	3 D18包
3 D18出土和同開珎平均			24.82	20.74	7.71	6.45	1.43	0.54	2.73	---
41	和同開珎銅銭	新和同	23.78	20.52	7.50	6.24	1.31	0.71	2.36	5 C 7包
42	和同開珎銅銭	新和同	24.65	20.85	7.46	6.24	1.24	0.47	1.46	5 B 4包
43	神功開寶銅銭	長	24.89	20.66	7.61	6.17	1.58	0.93	3.04	4 B 24包

銭貨計測表 (計測部位は『平城宮発掘調査報告VI』に準拠)



46 古式土師器 壺



49 須惠器鉢



50 須惠器鉢



47 土師器双耳壺



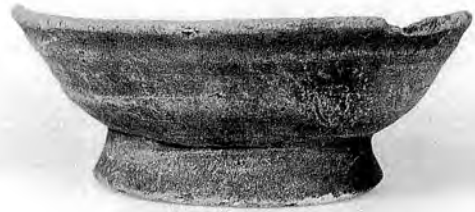
51 須惠器椀



52 須惠器椀



48 須惠器高杯



53 須惠器椀

出土遺物(土器)

## 付編. 遺跡調査の歩み

新潟市教育委員会が平成2年度までに調査した遺跡と刊行物の一覧表を示す。当市の埋蔵文化財保護行政の歩みを知っていただければ幸いです。

調 査 期 間	遺 跡 名	調査種別	調査原因	備 考 ・ 報 告 書 等
昭和47年11月4・5・6 12・18・19日	茗荷谷	緊急調査	砂取り	「茗荷谷遺跡」『報告書2』（註）
昭和48年2月15日～18日	緒立城館跡	緊急調査	県道建設	
昭和57年4月5日～4月12日	六地山	試掘	遺存状況調査	『報告書1』
昭和58年5月17日	神谷内	立会い	砂取り	
昭和59年9月11日	六地山	緊急調査	ホテル建設	
昭和60年7月4日～7月16日	古屋敷	範囲等確認	土地区画整理	『報告書3』
昭和60年11月13日～11月16日	六地山	範囲等確認	市道拡幅	『報告書8』
昭和60年10月22日	小丸山	分布	団地造成	『報告書4』
昭和61年3月15日～3月16日	前山	試掘	遺存状況調査	
昭和60年8月2日～7日 11月9・15・16・23・24日	詳細分布調査	分布	遺跡周知	
昭和60年度 通 年	大江山地区	採集資料調査	遺跡周知	『報告書2』
昭和61年5月2日～5月3日	史跡旧新潟税関 隣接地	試掘	公園整備	
昭和61年6月9日～8月1日	小丸山	範囲等確認	団地造成	「小丸山遺跡範囲等確認調査」 『報告書4』
昭和61年8月8日～8月23日	小丸山	本格	団地造成	『報告書5』
昭和61年10月31日～11月2日	的場	範囲等確認	土地区画整理	「的場遺跡範囲等確認調査」『報告書4』
昭和61年12月3日	荒所・石ナゲ山	分布	農業基盤整備	
昭和62年3月20日	南蒲原	分布	スポーツセンター建設	『報告書6』
昭和61年度 通 年	大江山地区	採集資料調査	遺跡周知	『報告書2』
昭和62年8月18日～9月30日	南蒲原	範囲等確認	スポーツセンター建設	『報告書6』
昭和62年9月21日	前山	立会い	住宅建設	
昭和62年10月3日	小丸山	立会い	道路建設	
昭和63年2月27日～2月28日	(太右衛門新田)	試掘	道路建設	
昭和63年3月23日～3月24日	前田	試掘	工場建設	『報告書7』
昭和63年4月19日～4月22日	前田	試掘	工場建設	『報告書7』
昭和63年5月24日～4月26日	前田	試掘	倉庫建設	『報告書7』
昭和63年5月10日	大藪	試掘	葉たばこ乾燥施設建設	『報告書7』
昭和63年7月13日～7月14日	茗荷谷	分布	土地区画整理	『報告書7』
昭和63年8月1日～8月5日	茗荷谷	範囲等確認	土地区画整理	『報告書7』
昭和63年11月21日～11月30日	ツル子B	試掘	工場拡張	『報告書7』



調 査 期 間	遺 跡 名	調査種別	調査原因	備 考 ・ 報 告 書 等
平成元年4月19日	下場	分布	道路拡幅	
平成元年4月19日	丸山	分布	道路拡幅	
平成元年4月19日	北山	分布	道路拡幅	
平成元年4月19日	山木戸	分布	遺跡周知	新発見、『報告書8』
平成元年6月23日	茨曾根	試掘	個人住宅建設	「1989年度調査概要」 『報告書8』
平成元年7月25日	古屋敷	立会い	住宅建設	「1989年度調査概要」 『報告書8』
平成元年8月1日～11月18日	的場	本格	土地区画整理	「的場遺跡発掘調査概要」 『報告書8』
平成元年10月19日	山木戸遺跡 隣接地	試掘	個人住宅建設	「1989年度調査概要」『報告書8』
平成元年12月5日	丸山	立会い	工場建設	「1989年度調査概要」『報告書8』
平成2年3月20日	内野潟端A	試掘	団地造成	「1989年度調査概要」『報告書8』
平成2年4月16日～11月9日	的場	本格	土地区画整理	「的場遺跡発掘調査概要」 『報告書8』
平成2年7月2日～7月5日	山木戸	試掘	マンション建設	「山木戸遺跡確認調査報告」 『報告書9』
平成2年10月2日	前山	立会い	個人住宅建設	「1989年度調査概要」『報告書9』
平成2年11月20日	山木戸遺跡 隣接地	立会い	個人住宅建設	『報告書9』
平成3年2月13日	彦七山	現地確認	個人住宅建設	『報告書9』
平成3年2月20日～2月21日	緒立城館跡 隣接地	立会い	警察署建設	『報告書9』
平成2年3月21日	坂田地区	分布	大学建設	『報告書9』
平成3年3月22日	鳥屋野潟 南部地区	分布	スポーツゾーン建設	『報告書9』

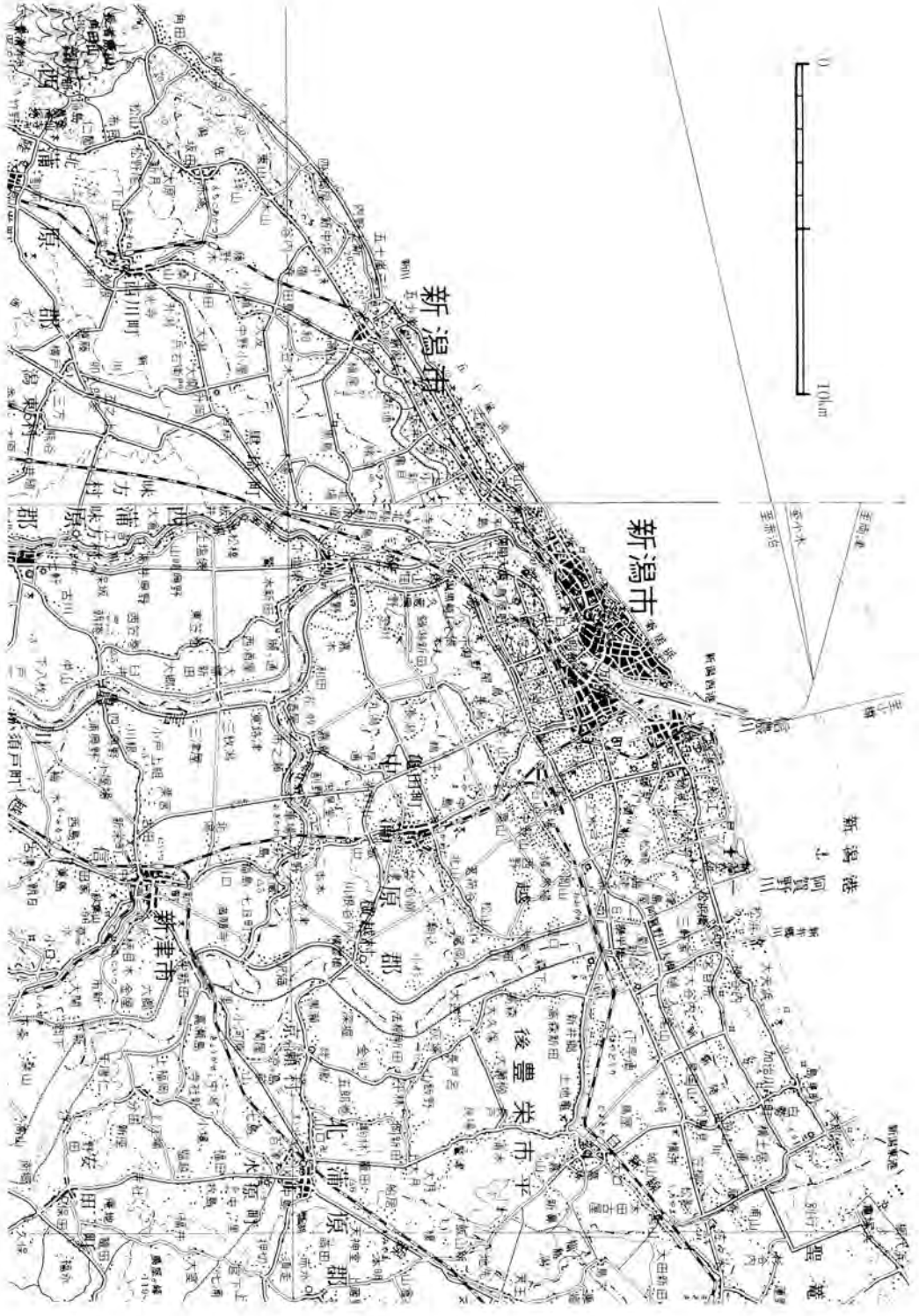
註) 備考・報告書等の欄の報告書番号は下表の番号と一致する。

### 新潟市埋蔵文化財関連刊行物一覧表

番 号	刊 行 物 名	ペー ジ 数	発 行 年 月 日
1	六地山遺跡－1982年発掘調査を中心に－	64 P	昭和61年3月31日
2	大江山地区の遺跡	54 P	昭和62年3月31日
3	古屋敷遺跡発掘調査報告書	12 P	昭和61年2月28日
4	新潟市小丸山遺跡・的場遺跡範囲等確認調査報告書	22 P	昭和62年3月31日
5	小丸山遺跡発掘調査概要	40 P	昭和62年3月30日
6	南蒲原遺跡範囲等確認調査報告書	16 P	平成元年3月30日
7	1988年度埋蔵文化財発掘調査報告書	42 P	平成元年10月5日
8	1989年度埋蔵文化財発掘調査報告書	42 P	平成3年3月30日
9	1990年度埋蔵文化財発掘調査報告書	24 P	平成4年3月30日

1990年度埋蔵文化財  
発掘調査報告書

発行日 1992年3月30日  
発行 新潟市教育委員会  
新潟市学校町通1番町602番地1  
〒951 TEL. (025)228-1000  
印刷 (有)太陽印刷所  
新潟市和合町2丁目4番18号  
〒950 TEL. (025)265-3101



新潟市地勢図 (国土地理院「新潟」「長岡」)